京都大学人文科学研究所共同研究 最終報告書

1. 研究課題
清代～近代における経学の断絶と連続：目録学の視角から
(Dis)Continuity of Jingxue from the Qing Period through to the Modern Age:
From the Perspective of Muluxue

2. 研究代表者氏名
竹元　規人
Takemoto Norihito

3. 研究期間
2020 年 4 月-2023 年 3 月

4. 研究目的
中国は独自の伝統的学術を有し、それは長い歴史のなかで大きな変遷をたどって来た。本研究は、その学術の清代から近代にかけての断絶と連続を、次の視角から明らかにすることを目的とする。まず、章学誠の「六経皆史」説などを根拠として、「経学から史学へ」という命題が中国近世・近代思想史において言われるが、学術の淵源と展開を跡付け、学術を分類しながらその統一的把握を図る章の目録学の立場から出発して、経学が史学を含む様々な学術へと転換する契機を清代学術史の中に探る。次に、「六経皆史」への解釈等、清代学術に関する通説的理解がいかにして確立してきたのか、清末以来の学術史の言説を見直すことで跡付ける。最後に、第一の視角によって得られた清代学術史の見通しの上に、第二の視角から跡付けられた近代学術史を位置づけることで、二つの視角を総合し、それによって清代から近代にかけての、経学の断絶と連続とを、鳥瞰的に明らかにする。
China has its own traditional scholarship, which has undergone a great deal of change throughout its long history. The purpose of this study is to clarify the (dis)continuity of Chinese scholarship from the Qing period to the modern era using the following perspectives. First, based on Zhang Xuecheng's contribution to Muluxue, we look for those opportunities in the history of scholarship throughout the Qing period that have allowed for the transformation of Jingxue into various academic disciplines, including history. Zhang's Muluxue traced the origins and development of scholarship, classified it, and tried to present it in a unified manner. The theory of "Liu Jing Jie Shi (the Six Classics are all history)" does not necessarily only apply to the transformation "from Jingxue to history". Second, we trace how the commonly held understanding of Qing scholarship, such as the interpretation of the

theory of “Liu Jing Jie Shi “, was established by reviewing the discourse on the history of scholarship that has occurred since the late Qing period. Finally, we combine these two points of view to provide a bird’s-eye view of the (dis)continuity of Jingxue from the Qing period through to the modern era.

5. 研究成果の概要

本研究班は，清代から近代にかけての，中国学術の断絶と連続とを探究するという目標のもとに，まず，前近代と近代との結節点のひとつである，章学誠『文史通義』の訳注に取り組んできた。2022 年度に内篇五の訳注を刊行したことで，『文史通義』内篇の訳注を完成させることができた。

章学誠の目録学の思考が中国学術史上に持った意味と射程については，2020 年度の国際ワークショップ「中国学術史と文献学――章学誠の学術構想を起点として」で検討し，その認識を基礎として，2022 年度の国際ワークショップ「中国近代における経書の受容と変容」において，経学に即して，清代から近代への断絶と連続の相を探ることができた。

2022 年度の国際シンポジウム「近代日本・中国における章学誠研究熱の形成とそのインパクト―内藤湖南、胡適および 20 世紀中国学の諸相―」では，章学誠に対する認識の形成と変遷を，清代から近代への断絶と連続の一つの事例と捉え，検討を進めた。

訳注完成後は，研究論集『章学誠の可能性』の刊行に向けた研究発表を班内で進め，章学誠の学術構想を通して古代から近現代に至る中国学術史を俯瞰する知見を蓄積した。

6. 共同研究会に関連した主な公表実績

2021 年 3 月 14 日　国際ワークショップ「中国学術史と文献学――章学誠の学術構想を起点として」

「『文史通義』内篇四訳注」(『東方學報』96 号、2021 年 12 月)

2022 年 7 月 31 日　国際シンポジウム「近代日本・中国における章学誠研究熱の形成とそのインパクト―内藤湖南、胡適および 20 世紀中国学の諸相―」

「『文史通義』内篇五訳注」(『東方學報』97 号、2022 年 12 月)

2023 年 3 月 19 日　国際ワークショップ「中国近代における経書の受容と変容」

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

今年度研究班において準備を進めてきた，研究論集『章学誠の可能性』について，今後も準備を継続して再来年に刊行する予定である。

本研究班において訳注を発表してきた『文史通義』内篇について，全体に編集を加え，単行本として刊行することを目指す。

その他，本研究班において得られた知見を基礎として，清代から近代に至る中国学術史に関連する研究を，国内外の研究者の協力を得つつ展開し，成果を公表していく。